

# ペットライフ

mail:bunka1@ma.kitanippon.co.jp

獣医の  
カルテ



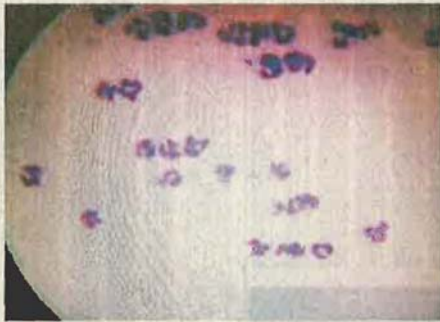
57



マイム犬猫病院長  
(射水市小島)  
長井 崇典

犬に「元気や食欲がない」という症状を呈する病気は多いのですが、その中の一に「免疫介在性関節炎」があります。「免疫」とは、体内に病原体が侵入した際、それらを排除しようとする防御システムのことです。本来は体を守るべき免疫の仕組みが、何らかの理由で自身の関節組織を攻撃して炎症を起こすのがこの病気です。感染症や腫瘍などの病気に付随して発症することもあります。多くの場合、その原因はよく分かっています。国内では、ミニチュア・ダックスフンド、トイ・プードルのような小型犬に発症例が

## 免疫介在性関節炎



関節液内に多量に出現した好中球

## 早期発見で進行遅らさす

多く認められますが、猫にも同様の病気があります。最も一般的な症状は、元気消失、食欲不振、発熱です。発症している犬の半数以上は、関節炎に伴う歩行異常が出ないとされています。しかし、病気が進行すると、関節の軟骨が破壊されて手足が変形する、関節が脱臼するなど、重

症化した「関節リウマチ」になることもあり、治療が困難になっていきます。この病気は、血液検査やレントゲン検査などの一般的な検査だけでは診断が難しいため、さまざまな検査を組み合わせて探る必要があります。その中で最も重要な検査は、犬の関節に針を刺して関節

こっている免疫反応を抑えるために、ステロイドや免疫抑制剤などの薬が必要となります。残念ながら、完治することは少なく、治療をスタートしたら生涯にわたって薬を飲ませながら症状を抑え、長く付き合っていく必要があります。この病気をそのものを予防する手

液を採取するものです。

免疫介在性関節炎を発症した犬では、関節液内に写真のような好中球（白血球の一種）と呼ばれる炎症細胞が多数認められます。健康な犬には、このような炎症細胞はほとんど出現しません。細菌の感染による関節炎でも炎症細胞が増加する可能性がありますが、症例としては少ないようです。治療には、犬の体内で過剰に起

段は、残念ながら今のところ見つかっていません。この関節炎を疑い、検査することによって早期に発見できれば、症状の進行を遅らせることが可能になります。適切な治療を続けることによって、犬の生活の質を少しでも良くし、猫の生活の質を少しでも良くし、健康を維持させたいものです。元気や食欲がなく、熱があるようならこの病気も視野に入れ、まずは早めに受診してください。